



友情が築いた平和展と市民交流

三代沢 史子

■三代沢史子（みよさわちかこ）〈プロフィール〉

国立音楽大学音楽科卒業。教室「ミュージック・アート」主宰。日本美術家連盟会員、音楽教育国際会議会員。著書『すれぬあの日』（日本図書センター）他。

十人十色というが、絵描きにも色々なタイプがある。旅行中は一箇所に一日中座って描く人、出来るだけ歩き回ってスケッチする人、そしてゆっくりその土地の空気を吸いそこに住む人たちの生活を観察し色や形を見て歩く人。私は最後にあげたタイプかもしれない。

1989年6月17日、その日私は大先輩と煙をはく木炭バスに乗ってピレ門まで行った。ここ旧ユーゴスラビア内クロアチアの城砦都市ドブロヴニクは「アドリア海の真珠」と呼ばれるリゾートである。中世からの街は石の城壁でがっちり囲まれていた。城壁を見上げるとそこに石のお地蔵さまのようなもの—聖ブラホ像—が見えた。街を抱いているようで珍しいな、と私の心を捉えた。

城壁はアドリア海に面した側とスルジャ山に面した側の内陸部をつなぎ街を取り囲んでいる。城内は民家や商店、教会、学校等、市民の生活の場になっている。アドリア海は鏡のように静かで初夏の日差しの中にブーゲンビリアの花が降るようにあふれ咲いていた。

私はスルジャ山を見上げて「途中まで登ればこの街が一望できるのではないか」と城塞から出たくなくて歩いて行った。坂道を登っていくとやはり思った通り眼下に旧市街が見えてきた。そこで私は描き始めた。鳥のさえざりと人の声はしたが人影は見えなかった。しばらく描いていると上の方から人の歩いてくる音がした。買い物籠を下げた夫人だった。「ここが気に入った？」と聞くので、「美しい」と答えると「買い物から戻って来たらもっといい景色が見える我が家へこないか」と道を下りていった。一時間後、私は初めてリフィカさんの家へお邪魔した。建ちあがったばかりの家で私は彼らのディナーにあたる昼食を、日本を出て十日目のお米のご飯、ダルマチアの家庭料理・リゾットをご馳走になった。彼女との出会いはこれだけのものではなかった。リフィカさんも私も遠い見知らぬ国への興味だけがあったのかもしれない。言葉が十分理解し得ない二人は絵葉書の交換をした。

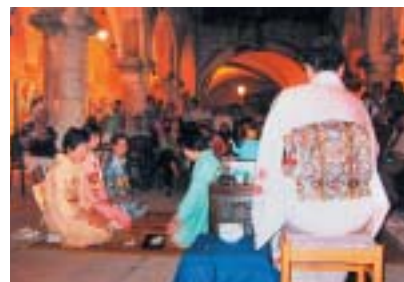
一年半後ユーゴスラビアは内戦に突入した。爆撃、疎開、物資の不足、怪我、子どもの行方不明、親族を失って精神に異常をきたす、戦死。いづこの時代、いづこの戦争も人々の苦しみは同じである。小学生の二人の子どもをかかえたリフィカさ

んもこれらの心身の悩みから逃れることはできなかった。「助けて！」と封書の表全面に書かれた手紙をもらい、少しでも彼女の力になりたくて「リフィカと旧ユーゴスラビア救援基金」を設立した。



マリン・ドルチッチ小学校庭で歓迎(8年制)

一体誰が何をしなくて起こした内戦だったのだろうか。多種の民族、言語、宗教が異なった国の内戦は複雑である。2001年、スロベニアからクロアチアへの車道の国境はまるで笹竹を二本継ぎ足して作ったような遮断機があるばかりだった。今年のオーストリアとチェコの国境も同じようであった。国のあちこちで小さいさかいがくすぶる時、わずかに離れた道路の向こう側が他国であるという現実、庭の木々の枝が邪魔になるという隣人同士の小さなトラブルでも内戦の発端になりかねない。また他方では、民族は違っても50年前にかくまわれて助かった人たちが恩を忘れず今度は手を貸して助けることも民間ではかなりあったようだ。



茶の湯□入場制限しながら(スポンザ宮にて)

クロアチアが独立し平和が戻り救援基金は10年を節目に終了することにした。2005年クロアチアを訪れた時リフィカさんから私の個展をドブロヴニクすることを提案された。わたしの心の中で温めていた街を抱く聖ブラホがぼつぼつ作品となり始めていた。

多くの方々のご協力があった基金。私だけの喜びではなく市民の喜びとしてと呼びかけたところ、これこそ市民平和交流と賛同を得、13名の方々が同行してくださった。平塚七夕、ベルマーレのクロアチア選手のパネル、市民から寄せられたお雛様、振袖、能面の展示、茶の湯の実践など日本文化の紹介に全員が尽力した。茶の湯は干菓子の美しさと美味しさに300余の市民が参加で好評を得た。当日の様子は「10年に渡る平塚市民の基金と援助はリフィカさんを通じてドブロヴニク市で最も必要とされた人々に分配された」というニュースとともにクロアチア全土で新聞、テレビ、ラジオを通じて報道された。



展覧会場スポンザ宮で
(左)リフィカさん□(右)三代沢

人と人との心のつながりは隣人も国境を越えたはるかな国も変わりはない。平和をつくる小さな芽はここから始まり互いにしっかり手をつないでいくことだと思う。